

日本語助数詞「台」の分析

佐藤 貴史

キーワード 分類、助数詞、「台」、特徴、連続的な性質

0. はじめに

日本語では事物の数を数える際、イチ・ニ・サン…と数詞のみで数える場合に加え、数詞の後に接辞を置いて数える場合があり、この接辞は助数詞と呼ばれる。今回はそのうちの「台」について考察を行う。

1. 助数詞についての先行研究

日本語助数詞の用法に関する研究としては、「本」についてのLakoff (1984)、Matsumoto (1986)、Iida (1997) がある。また「台」については、幼児の言語習得に着目したものとしてSanches (1977)、松本 (1984)、Matsumoto (1985)、Matsumoto (1987) がある。「台」の用法に関する研究としては松本 (1991)、飯田 (2000) がある。松本 (1991) は「台」を用いて数えられる名詞に対して四つの典型条件を設定している (pp.93-94を要約) が、それぞれの条件が設定されるに至った根拠は示されていない。<物を運ぶ>は「のせる」「動かす」の組み合わせとして更に細分化して扱える。一方、飯田 (2000) は「台」を用いて数える名詞を三つに下位分類し、そのうちの一つを「特定の機能を持ったもの」と呼んでいる (p.209) が、この分類名に従うと「液体や粉末をすくう」という特定の機能を持つスプーンまでもが「台」で数えられることになるため、より説得力のある分類が必要とされる。また、「つ」に関連する研究としては飯田 (1998) がある¹。

2. 用例の採取方法と提示方法

朝日新聞のデータベース (<http://www.asahi.com>) を使用し、朝日新聞朝夕刊

本文から用例を採取した²。各例文の末尾の数字は掲載された年月日を表す。本論文の以降においては、パソコン・自動車・自転車・ベッドが「台」で数えられていることに注目し、まずは四つの仮分類を設定する。三節から六節までにおいては、それぞれの仮分類に含まれると思われる種々の名詞が「台」で数えられている例を挙げ、各節の最後では仮分類名にかわる正式の分類名を提示する。

3. パソコンのグループに対する「台」の用法

本節では、パソコンが「台」で数えられることと関連して扱える種々の名詞について考察する。

3. 1. 電子計算機

パソコンとは電子技術を応用して計算やデータ処理を行う装置であり「台」で数えられるが、その例を下に示す。

(1) パソコンが一台あれば、中小企業でも取引に参加できる。(98. 11. 26)

「台」以外を用いてパソコンを数えることはできるだろうか。ある名詞は「台」のみで数えられるが、ほかに「台」以外でも数えられる名詞があることには注目すべきであるため、以降においては必要に応じ「台」からほかの助数詞への置き換えを試みるが、下には「個」への置き換え例を示す。

(2) 部屋の中央に新品のパソコンが一台 (*一個)。 (98. 10. 07)

「台」との置き換え例を提示するにあたって使用される助数詞は場合によって異なりうるが、ここでは「個」との置き換えを示すことによって、パソコンを含む電子計算機類を数える際に「台」以外に使用される助数詞は筆者の直観では認められないものとする³。

3. 2. 自動販売機

個人が紙幣もしくは硬貨を入れると商品を出す機械、すなわち自動販売機に対して「台」は使用される。以下に例文を示し、さらに「個」では数えられないことを示す。

- (3) 同市岡本二丁目のたばこ店で十五、十六日の両日、たばこの自販機二台（*二個）から計四十一枚の変造硬貨が見つかった。(98. 05. 17)

自動販売機は、電子計算機と同じく「台」のみを受容するといえる。続いて、機械類に属するほかの名詞類と「台」の受容について考察を進める。

3. 3. 光学機器

光学機器とはレンズやプリズムを利用した機器、すなわちカメラ、望遠鏡、顕微鏡などのことであるが、ここではカメラに対する「台」の用法について述べる。下には例文を示すとともに「台」から「個」への置き換えを示す。

- (4) 今回はドイツやイタリア、フランス、日本の十二台（*十二個）のカメラを使って国内外の風景などを撮影、A2版大のカレンダーに引き伸ばした。(98. 01. 14)

上例のようにカメラは「台」のみを受容しほかの助数詞は受容しないが、使い捨てカメラは「台」では数えられない。下に使い捨てカメラを「個」で数えている例文を示すが、「台」で数えられる名詞と「台」で数えられない名詞を区別して把握するために、「個」から「台」への置き換え例をも示す。

- (5) 同会館前の写真店は使い捨てカメラの臨時売り場を設置。百個（*百台）以上が売れる盛況ぶりだった。(94. 01. 16)

カメラと使い捨てカメラは、写真を撮影するという目的については共通しているが「台」の受容の点で異なる理由については後ほど考察する。

3. 4. 通信機器

音声や文字を個人がやりとりする際に使われる通信機器も「台」で数えられる。電話に対して「台」が使用されている例を下に示すが、「台」のみで数えられる名詞と「台」以外でも数えられる名詞を区別して把握するために、これらの例文内の「台」を「個」に置き換えた例を同時に示す。

- (6) 公衆電話ボックスが極端に少なかった福岡市早良区の百道浜地区に、NTTが国際電話もかけられる十一台（*十一個）の公衆電話を設置する。(95. 07. 02)

しかしながら、通信機器の一種であるポケベルは「台」ではなく「個」で数えられることを、データベースにおいて採取した例によって下に示す。

(7)すでに、六月から三十個のポケベルを組合で購入、(本文後略)
(98. 07. 07)

通信機器の中でも、ポケベルは「台」以外の助数詞で数える。電子計算機類や自動販売機は様に「台」で数えられるものの、通信機器には「台」以外の助数詞で数えられるものがある理由についての考察に移る前に、類似した現象がほかに見られるかどうかを3. 5. において述べる。

3. 5. ゲーム機器

おもちゃの中でも、電気を動力源とし、ボタンやレバーを操作することで遊ぶゲーム機器に対しては「台」が使用される。その実例を下に示す。

(8)ドリームキャストを一千万台売るには、五万台売れる仕掛けを二百個用意すればいい。(98. 12. 05)

ただし、ゲーム機器の中でもたまごっちは「台」を用いては数えられない。このゲーム機は、大きさが数センチしかない小さなものであり、ボタン型電池を電源とした液晶の画面に表示される画像を見て遊ぶ。下に例文を示す。

(9)たまごっち十個で、混乱—(本文後略)(97. 04. 30)

ゲーム機器の多くは「台」のみで数えられるが、中にはたまごっちという、「台」では数えられないものがある。これは電子計算機や自動販売機がおしなべて「台」のみで数えられることとは相反するものである。また、通信機器がおおむね「台」のみで数えられるものの、一部にはポケベルという「台」では数えられないものがある事実とは類似している。

3. 6. 楽器類

楽器類を数える際に「台」は使用される。ただし、これまでに分類したおのおの機械類においては、その分類に属するすべて、または大部分の名詞に対して「台」は使用でき、「台」が使用できない場合はないか少数であったのとは異なり、「台」の使用できる楽器は鍵盤楽器や一部の弦楽器類・打楽器類に限定

される。以下、種々の楽器に対しての「台」の用法について述べる。

3. 6. 1. 鍵盤楽器

楽器類を「台」で数えている例として、第一にピアノを取り上げる。下にその例を示す。

(10)使われずにいた一台のピアノが、六日、福島市の鳳来学習センターで開かれたクリスマスコンサートの“主役”になった。(98. 12. 07)

このようにピアノは「台」で数えられるが、次に鍵盤楽器以外の楽器に対し「台」が使用されている例を指摘する。

3. 6. 2. 弦楽器・打楽器

ピアノ以外の楽器を「台」で数えている例として、まず一部の弦楽器を取り上げる。下の例を見よ。

(11)演奏会后、篤志家からチェロ一台が贈られた。(99. 02. 21)

また、一部の弦楽器は「丁」を用いても数えられる⁴。次に打楽器を数える際に「台」が使用されている例を下に示す。

(12)今回のコンサートで使われるのは、美しい有田焼の模様を施した和太鼓十一台とシンバル代わりになる大皿、鉢など。(95. 07. 22)

打楽器類にはほかにカスタネットやタンバリンなどがあり、「台」ではなく「個」で数えられるがこれらはいずれも小型の打楽器であり、大型の打楽器に対してのみ「台」は使用される。このように本節で扱った名詞に対する「台」の用法は一様なものではないが、この理由について次に述べる。

3. 7. <機械性>という特徴についての考察

カメラと使い捨てカメラは「台」の受容の点で異なっていた。両者は写真を撮影する目的で使用されるという点においては共通しているが、筆者の知識では使い捨てカメラはカメラに比べはるかに安価である上、駅の売店やコンビニエンスストアでも販売されており、いくなればカメラに比べ取り扱いが簡単であるといえる。これは使い捨てカメラがカメラに比べ仕組みが簡単にできてい

ることに由来している（写真を撮影するという点においては同じ仕組みであるといえるが、その仕組みの程度に違いが認められる）ためであると思われるこの仕組みの複雑さの違いの事を＜機械性＞の違いによるものとする。＜機械性＞は、電気もしくは燃料を使う・ICを内蔵している・金属製であるなどへとさらに下位分類して示すことができ、これまで提示してきた名詞においては、これらの下位分類が満たされている度合いにより＜機械性＞の強弱が分かれる。ただし、種々の下位分類はすべてが対等な価値を持つものではない可能性がある。

また、ポケベルは＜機械性＞を満たしている度合いが強いように思われるが、「台」で数えることはできない。その理由について次に述べる。

3. 8. 「台」の使用に関連するほかの特徴について

「台」を用いることができるか否かは、＜機械性＞のみに左右されるわけではない。ポケベルは「台」で数えられないことを先程述べたが、この理由はポケベルがほかの通信機器に比べて大きくないことにある。電波を受信し、メッセージを液晶により表示するという機能を持ち、＜機械性＞という特徴を満たしている度合いが強いように思われるポケベルは、その小ささのために「台」を用いて数えることができないのである。さらに、「台」の使用できる打楽器類は大型のものに限られるが、小型の打楽器はその小ささのため「台」を用いて数えることができないのである。よって「台」の使用には＜機械性＞という特徴のほかに＜大きい＞という特徴が関与しているといえる。

3. 9. まとめ

本節の分類に属する名詞と各特徴間の関係を図表 I において整理した。本節で指摘した二つの特徴はいずれも＋と－によって二分することのできない連続的な性質を持つため、＜機械性＞については「強・中・弱・なし」、＜大きい＞については「大・中・小・極小」という基準を設け、筆者の判断によりそれぞれの名詞に対する評価を行った。

名詞	「台」の受容	機械性	大きい	使用される助数詞
パソコン	+	強	中	台
自動販売機	+	強	大	台
黒電話	+	強	中	台
ポケベル	-	強	極小	個
ドリームキャスト	+	強	中	台
たまごっち	-	弱	極小	個
カメラ	+	強	中	台
使い捨てカメラ	-	中	小	個
ピアノ	+	中	大	台
バイオリン	+	中	中	台・丁
カスタネット	-	なし	小	個

図表においては、<機械性>が「弱」もしくは「なし」である場合や、<大きい>が「小」もしくは「極小」である名詞は「台」を用いて数えられないことが示されている。

最後に、本節で記述した「台」で数えられる一連の名詞は機械類及び機械に準ずるものであったことから、仮分類名にかわり〔機械類及び機械に準ずるもの〕という正式名称を提示し、本節の結びとする。

4. 自動車のグループに対する「台」の用法

「台」は自動車に対して使用されるが、以下においてはその際に認められる注目すべき点について用例を引用しながら述べる。

4. 1. 車輪を持つ乗物

「台」は、四輪や二輪の自動車を数える際に使用される。例文を下に示す。

(13)今の日本は少なくとも当時の米国を追い越して、一家に一台以上の自動車を持ち、町には車があふれています。(98. 02. 26)

(14)ミニバイクに乗っていた同市内の高校生ら三人が、ミニバイク五、六台に分乗した少年グループ約十人に襲われた。(98. 08. 07)

これら二つの例文のいずれにおいても「台」をほかの助数詞へ置き換えることはできず、自動車のグループに属する名詞のうち、四輪もしくは二輪のものは「台」のみで数えるということができる。

4. 2. 車輪を持たない乗物

車輪を持たない乗物に対して「台」が使用される場合がある。乗物の具体的な名称はエスカレーターとエレベーターであるが、おのおのが「台」で数えられている例を下に示す。

- (15)神戸市の同市営地下鉄の三宮駅では、4台のエスカレーターに「お急ぎの方のために左側をあけて下さい」という案内板を取り付けている。
(92. 02. 24)

- (16)これまで、三台のエレベーターの扉のわきには、上り下りを示す表示灯しかなかった。(99. 12. 09)

なお、エスカレーターとエレベーターに対しては「台」以外に「基」も使用される。このように自動車のグループの中には「台」と「台」以外の助数詞のいずれを使用してもよいものがある一方で、飛行機・船・電車は「機」「隻」「艘」「両」など「台」以外の助数詞でしか数えられない。この理由は、空中・水上・軌道上など陸路以外を移動する乗物を数えるためには「台」は使用されないという性質を指摘することによって説明されうる。

4. 3. まとめ

以上、自動車のグループに属する名詞に対する「台」の用法について述べた。本節において扱った名詞に対する「台」の受容及び各特徴との関係を図表Ⅱにおいて整理した。

名詞	「台」の受容	機械性	大きい	車輪を持つ	陸路を移動する	使用される助数詞
自動車	+	強	大	+	+	台
バイク	+	強	大	+	+	台
エレベーター	+	強	大	-	-	台・基
ジェット機	-	強	大	-	-	機
タンカー	-	強	大	-	-	隻

この表においてはいずれもの名詞が<機械性>が「強」であり、また<大きい>が「大」になっているが、陸路を移動するか否かによって「台」の使用に差異が生じることが示されている。(ジェット機は滑走路を車輪によって移動するが、筆者はこれを補助的な移動方法であるとして無視した。また、タンカーは極めて巨大であり、<大きい>が「大」にとどまっていることは不自然であるかもしれないが、<大きい>について提示した尺度が四つであったことから「大」であるとした。)

なお、本節のグループの正式名称は次節の終りにおいて示すものとして、本節の結びとする。

5. 自転車のグループに対する「台」の用法

本節では自転車のグループに属する種々の名詞について、例文を引用しつつ考察を行う。

5. 1. 車輪を持つ乗物

自転車は「台」によって数えられるが、その例文を下に示す。

- (17) 自転車がない人たちのために、同センターが二十一台を用意した。
(98. 12. 07)

また曲芸用の一輪車や、車輪の数が筆者には判断のしがたい手押し台車やストレッチャーも「台」で数えられる。このように種々の乗物に対する「台」の用法をみると、車輪の数は「台」の使用と関連がないようである。

さらに祭りの際に使用される曳山車は「台」及び「基」を用いて数えられる

が、「台」を用いて数えられている例を下に示す。

- (18)あいにくの雨模様のため、神霊が祭られた御旅屋二十一台の曳山車が集まり町へ繰り出す一斉巡業は中止。(99. 04. 25)

5. 2. 車輪を持たない乗物

乗物の中にはこれまでの例とは異なり、車輪によっては移動せず車輪以外の方法で移動するものがある。例文を下に示す。

- (19)もう一台の二人乗りのそりは、競技連盟のスポンサーの機械メーカーが購入したという。(98. 02. 23)

そりは車輪のかわりに刃を用いて移動するが、「台」で数えられる。また、祭りのみこしは車輪を持たないが、「台」で数えられる。例を下に示す。

- (20)三台のみこしをふもとに下ろす祭りで、途中まで担いで下ろした後、ふもとに近い約百五十メートルの斜面(約三〇度)を滑り下ろす。(98. 05. 05)

なお、みこしは「台」のみならず「基」を使用しても数えられる。

以上、自転車のグループに属する乗物に対しては「台」が使用できることを述べてきたが、いかだや救命ボートに対して「台」は使用されない。四節において、陸路を経由しない乗物は「台」で数えられないことはすでに述べたが、同様のことが自転車のグループにおいてもいえることになる。

5. 3. まとめ

以上、自転車のグループに属する名詞に対する「台」の用法について考察した。本節において扱った名詞に対する「台」の使用及び各特徴との関係は図表Ⅲにおいて示されている。この図表において注目すべきは「台」から「つ」への置き換えである。これまで使用を避けてきた「つ」を示す理由は、このグループにおいては「つ」で数えられるものと数えられないものがあり、「つ」の使用に関して自動車のグループと自転車のグループは異なることを示したいからである。また、自動車のグループに属する名詞は、「*一つの自動車」「*バイク四つ」のように、「つ」で数えられるものは見当たらない。よって「つ」への置き換えが認められるという点で、自転車のグループは自動車のグループと異

なっており、同じ乗物であっても二つのグループはそれぞれ別の範疇として扱うべき必要がある。

名詞	「台」の受容	機械性	大きい	車輪を持つ	陸路を移動する	使用される助数詞
自転車	+	中	大	+	+	台
手押し台車	+	弱	中	+	+	台・(つ)
ストレッチャー	+	弱	大	+	+	台・(つ)
そり	+	弱	中	-	+	台・(つ)
曳山車	+	弱	大	+	+	台・基
いかだ	-	なし	大	-	-	隻・艘

最後に仮分類名にかわり、今後は自動車のグループを「人やものをのせ人工的な動力源により移動するもの」、自転車のグループを「人やものをのせ人工的な動力源によらず移動するもの」と呼ぶこととし、本節の結びとする。

6. ベッドのグループ

助数詞ではない名詞の「台」には、「物をのせるためのひらたいもの」(『大辞林』p. 1429) という意味があるが、「台」は、人やものをのせるためのものとともに使用されうる。以下種々の名詞を、人をのせるためのものと、ものをのせるためのものに分類し論じる。

6. 1. 人をのせるためのもの

ベッドは睡眠の際に人が横たわるものであり「台」によって数えられる。その例を下に示す。

②) 医師や看護婦ら十人が常駐し、六台のベッド、成分採血装置などを備えている。(95. 12. 16)

ほかにもベッドと同様、人をのせるためのものを「台」で数えている例がある。その例文を下に示す。

- (22) トランポリンは米国人のジョージ・ニッセンが一九三六年に考案した。
 (本文中略) 日本に伝わったのは五九年。塩野さんは、日本に持ち込まれた最初の三台のうちの一台を使った。(97. 09. 19)

また、座るためのものは「脚」を使用して数えられるが、中には「脚」では数えられず「台」で数えるものがある。下に例文と置き換え例を示す。

- (23) 庭園の中に幅2－4メートルの遊歩道を設け、3台 (* 3脚) のベンチを置いた。(92. 05. 28)

ベンチは座るためのものであるが、座るためのものを数える際に用いられる「脚」で数えることができない。さらに、筆者の直観ではソファは「脚」ではなく「台」を用いて数えるが、ベンチとソファはともに大きいという点で共通している。以上のことから、座るために用いられるものの中には「脚」を用いては数えられず「台」を用いて数えられるものがある理由は、3. 8. で指摘した大きさに基づく特徴と関連があるものと思われる。

6. 2. ものをのせるためのもの

次に、ものをのせるためのものについての例文を下に挙げる。

- (24) 古田さんの家の庭にある材料置き場に行くと、こもをかぶったカマドが一台、ぽつんと置いてあった。(97. 10. 08)

- (25) 数年前から客足はどんどん遠のき、あの銀ジイがふんぞり返っていた二十二畳の座敷には、指し手のいない二十台の将棋盤がずらりと並んでいる。(97. 04. 28)

なお (24) の「台」は「個」へ置き換えることができるが、ここでは置き換え例は省略する。また、机を「台」を用いて数えている例文を下に示す。

- (26) 三十畳間のアトリエに四台の机を並べ、その上に厚板を置きいすに座って不自由な体を伸ばし、約四カ月がかりで描いた。(97. 02. 08)

座るためのものを数える際に使用される「台」と「脚」の使い分けには大きさという特徴が関与しているが、机は一樣に「台」と「卓」で数えることがで

きる。下に、机を「卓」で数えている例を示す。

⑦四人がけの机四卓に、八人が並んで座れるカウンターがある。
(98. 06. 10)

すなわち、ものをのせるためのものは「台」で数えることができ、さらに机は「卓」を使用することもできる。ただし「ものをのせるためのもの」であればおしなべて「台」が用いられるわけではなく、たとえばダンボール箱は「台」では数えられない。これに関しては、「ものをのせるためのもの」のうち、中がつまっていて重さがそれなりにあると話者が判断したものに対してのみ「台」は使用されるという理由が考えられ、ひいては助数詞の「台」と名詞の「台」との関連についての考察が必要となるが、これは今後の課題とする。

6. 3. まとめ

以上、ベッドのグループに属する名詞についての記述を行った。このグループを記述するにあたり、便宜的に人をのせるためのものと、ものをのせるためのものに二分したが、座るためのものの中でも大型のものに対しては「台」が用いられる。また机は一様に「卓」で数えられる。なお、本節において扱った名詞に対する「台」の使用及び各特徴間の関係を図表Ⅳにおいて整理した。図表においては、どの名詞も<機械性>は「なし」である上に<一移動する>である点において共通しているが、本節において述べたほかの理由によって使用される助数詞は異なる。

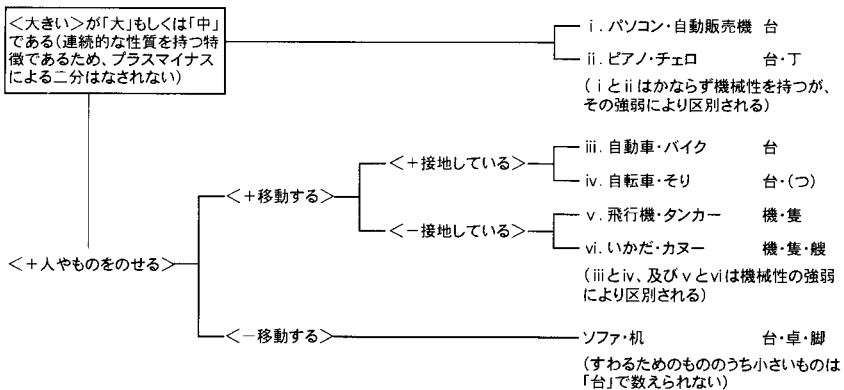
名詞	機械性	大きい	人やものをのせる	移動する	使用される助数詞
ベッド	なし	大	+	-	台・個
トランポリン	なし	大	+	-	台・個
椅子	なし	中	+	-	脚・個
ベンチ	なし	大	+	-	台・個
カマド	なし	中	+	-	台・個
机	なし	大	+	-	台・個

最後に、仮分類のかわりに今後はこのグループを「人やものをのせ移動しないもの」と呼ぶことに定め、本節の結びとする。

7. 結論

「台」の用法の記述を行うにあたり、まず「台」で数えられる名詞についての仮分類を行ない、それぞれの仮分類内の名詞に対する「台」の用法について記述を行ったうえで正式な分類名を付けた。本節では、今回行なったそれぞれの分類にはどのような性質が認められ、またそれぞれの分類はどのような相互関係にあるかを考察する。

第一にカメラと使い捨てカメラを数える際に使用される助数詞が異なることから、〈機械性〉という特徴が設定される。第二に〔機械類及び機械に準ずるもの〕のうちポケベルや小型の打楽器は「台」で数えられないことから〈大きい〉という特徴が設定される。第三に〔機械類及び機械に準ずるもの〕以外にも「台」で数えられるものがあることを考慮すると〈人やものをのせる〉を特徴として認めざるを得ない。第四に、〔人やものをのせ移動しないもの〕は、〔人やものをのせ人工的な動力源により移動するもの〕及び〔人やものをのせ人工的な動力源によらず移動するもの〕と、「移動する／しない」という点で対立しているため、〈移動する〉をパラメータとして認め、最後に飛行機や船は「台」で数えられないことに基づき、〈接地している〉を設定する。これら五つの条件の組み合わせは図表Vに示されている。



図表V 各条件の分布に関する図表

「台」で数えることのできる名詞はこれまでの分析によるとおしなべて〈大きい〉が「大」か「中」であったため、このことを図表の左上に示し「台」で

数えられる名詞が必ず持つ性質であることを示す。さらに、「機械類及び機械に準ずるもの」には「機械性」が必ず関与することをiiの下において文章によって示した。(なお図表のみを見ると、「一人やものをのせる」が「十人やものをのせる」と対立する特徴として「機械類及び機械に準ずるもの」に該当する箇所に記される必要があるように思われかねないが、ルームランナーや台秤など人やものをのせる機械があることを考慮し、「一人やものをのせる」はどこにも記さなかった。) またそれ以外の三分類においては、まず「十人やものをのせる」が現れ、この特徴を満たす名詞が次に「移動する」の「+」と「-」によってさらに区別される。これら三分類においては「機械性」はさほどはじめのほうには現れず、「十人やものをのせる」「移動する」ものが「接地している」の「+」と「-」によって区別された後にはじめて現われる。また、「十人やものをのせる」「移動する」ものは、「大きい」が「小」もしくは「極小」でないときのみ「台」で数えられる。

このように種々の特徴の組み合わせを分析し、さらに図によって示すと「機械類及び機械に準ずるもの」は、ほかの分類と特徴を対立させて取り扱うことができない、いうなれば他分類から孤立した範疇であるといえる。よって「機械類及び機械に準ずるもの」を数える際に使用される「台」と、ほかの三分類において使用される「台」は性質の異なるものとして扱う必要がある。しかし「機械類及び機械に準ずるもの」を分析していた際に認められた「機械性」という特徴は、「人やものをのせる人工的な動力源により移動するもの」と「人やものをのせる人工的な動力源によらず移動するもの」を互いに区別する際に関与する特徴であった。さらに「人やものをのせる人工的な動力源により移動するもの」の中で「台」で数えられるものは、ほかの助数詞に置き換えられることがまったくないが、この理由は「人やものをのせる人工的な動力源により移動するもの」はほかの特徴に加え「機械性」までもが「+」になっていることに基づいており、「機械性」による影響をここでも指摘することができる。これらの点を考慮すると「機械類及び機械に準ずるもの」とほかの分類はまったく関連がないとは認めがたい。よって「台」には①：機械類、②：人やものをのせるという二つの用法があり、①は「機械類及び機械に準ずるもの」という形で示され、②はこれまでに示したほかの三分類へと下位分類されるものとする。また、①と②には相互関連が認められるが、その程度は②の下位分類間どうしの関連の度合いに比べると弱いといえる。

注

- 注1 この論文については3. 1. で述べる。
- 注2 佐藤（2001）のAppendix Iにおいては、1998年分の紙面上で「台」で数えられていたすべての名詞がおのおの名詞の出現数とともに示されている。
- 注3 「基」及び「機」を用いてパソコンを数えている用例は今回の検索では認められなかった。なお、「一つ」を用いた場合は数えられるとする話者もいるが、「つ」は一から九までの直後にしか置かれないという点で「台」や「個」とは異なる性質を持つ。「つ」に関しては飯田（1998）が「個」との比較によって記述を試みているが、断定的な結論を避ける旨が記されている。よって今回は「つ」との置き換えは一部の箇所を除き控え、また「つ」「個」についての分析は行わない。
- 注4 本稿で詳しい分析は行わないが、「丁」及び以降において言及する「基」「機」「隻」「艘」「両」については佐藤（2001）において分析を行なった。

参考文献

- Iida,A. (1997) "Semantic Structures of Classifiers : The Meaning Chain of the Japanese Classifier -hon." *Tokyo University Linguistics Papers* 16.pp.173-196.
- 飯田朝子. (1998) 「日本語『ひとつ』『ふたつ』等の表現における“一つ”の意味と用法」 *Tokyo University Linguistics Papers* 17.pp.133-169.
- 飯田朝子. (2000) 『日本語主要助数詞の意味と用法』 博士学位論文 東京大学 人文社会系研究科
- Lakoff,George. (1984) "Classifiers as a Reflection on Mind." In Craig, Colette (ed.) , (1986) *Noun Classes and Categorization : Proceedings of a Symposium on Categorization and Noun Classification, Eugene, Oregon, October1983*. Amsterdam. pp.13-51.
- 松本曜. (1984) 「助数詞の意味習得について」『言語のダイナミックス』文化評論社 pp.194-206.
- Matsumoto,Y. (1985) "Acquisition of Some Japanese Numeral Classifiers : The

- Search for Convention.” *Papers and Reports on Child Language Development* 24.pp.79–86.
- Matsumoto, Y. (1986) “The Japanese Classifier -hon: A prototype semantic analysis.” *Sophia Linguistica* 20/21.pp.73–81.
- Matsumoto, Y. (1987) “Order of acquisition in the lexicon : implications from Japanese numeral classifiers.” *Children's Language* Vol6.pp.229–257.
- 松本曜. (1991) 「日本語類別詞の意味構造と体系:原形意味論による分析」 ('The semantic structures and systems of Japanese classifiers : A prototype-semantic analysis.') 『言語研究』 (*Gengo Kenkyu*) 99.pp.82–106.
- 松村明 (編). (1988) 『大辞林』 三省堂
- Sanches, Mary. (1977) “Language Acquisition and Language Change : Japanese Numeral Classifiers.” In *Sociological Dimensions of Language Change* . Sanches M.and B. Blount (eds.) , New York : Academic Press.pp.51–62.
- 佐藤貴史. (2001) 『日本語助数詞の分析 — 「台」を中心に—』 修士学位論文
金沢大学文学研究科

